

家族関係が個人の感情制御方略に及ぼす影響

○平部あずみ・安部主晃・中島健一郎
(広島大学大学院教育学研究科)

問題

本研究の目的は、個人の感情制御方略の選択に、家族関係が及ぼす影響について検討することである。感情制御とは個人内に生じた感情の強さを変化させることである (Gross, 1998)。感情制御の方略には様々な分類が報告されているが、本研究では対人的・非対人的感情制御 (Einat & Simon, 2016) という観点で感情制御方略を扱う。

家族関係が感情制御方略に及ぼす影響について、例えば思春期においては、家族との夕食頻度の少なさが、シンナー乱用や喫煙経験の多さと関連するとされている (Joseph et al., 2009, 和田, 2008)。他者との関わりを通して感情制御を行う対人的感情制御とは異なり、飲酒等のモノによる気晴らしは、気分の落ち込みへの非対人的対処行動の一つとされている (勝谷, 2006)。このことから、家族成員との親密さは、感情制御を行う際の制御方略 (対人・非対人) の選択に影響すると考えられる。

そこで本研究では、家族との親密さは対人的感情制御と正の関連、非対人的感情制御と負の関連があるという仮説を検討する。家族関係については、家族成員全体との親密さだけでなく、各家族成員との親密さのばらつきにも着目する。対人的感情制御の指標には、様々な感情を制御する際に利用する対人ネットワーク構造を測定する Emotionships を用いる。また、近年報告された研究として、感情制御と SNS との関連性が言及されている (柏原, 2011) ため、SNS も感情制御に用いられると考慮した上で検討を行うこととした。

方法

参加者 大学生 41 名

手続き 家族関係の測定については、Aron et al., (1992) の IOS 尺度を用い、家族の構成員との心理的距離を測定し、その平均と分散を算出することで分析に用いた。対人的感情制御の測定には、Cheung et al., (2015) および安部 (2016) の Emotionships の手法に則り、分析に用いる指標を算出した。非対人的感情制御の測定には、勝谷

(2006) の非対人的対処行動項目、および Jane & Jennifer (2014) の Frequency of Use and Impact of Regulation Strategies on Positive Emotion を用いた。また、感情を喚起するシナリオは Cheung et al. (2015) に基づき、7 つを用いた。

結果と考察

IOS 平均と IOS 分散 (いずれも中心化) を説明変数とし、感情制御方略 (対人的・非対人的) を目的変数とする階層的重回帰分析を行った。まず、ステップ 1 に各変数の主効果を投入し、ステップ 2 では 2 要因の交互作用項を投入した。その結果、対人的感情制御の指標として用いた Emotionships のうち、感情領域の広さ (7 つの感情シナリオのうち、感情制御の際に他者を求めるシナリオの数) に対して IOS 平均の主効果 ($\beta = 1.52, p < .01$)、および IOS 平均と IOS 分散の交互作用 ($\beta = 1.95, p < .01$) が有意であった。

単純傾斜の検定を行った結果、IOS 分散高群において、IOS 平均が感情領域の広さに正の関連を示した ($\beta = 2.69, p < .01$) (Figure 1)。

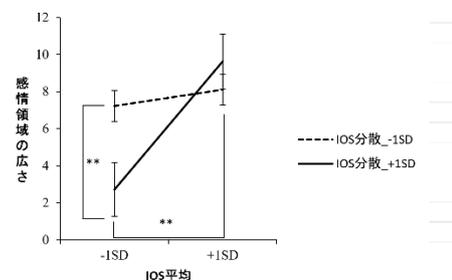


Figure 1. 単純主効果の検定

結果より、家族との心理的距離にばらつきがあり、かつ家族との心理的距離が平均して低いときは、様々な感情を抱く場面で人に話さなくなるという示唆が得られた。データに着目したところ、IOS 平均が低く、IOS 分散の高い参加者は、家族内で平均して心理的距離が遠いが、その中でも特に心理的距離の遠いメンバーが少数存在していた。このことから、家族成員全体との心理的距離が平均的に遠く、かつ家族内に特に仲が険悪な誰かが少数存在する者は、感情制御を行う際に他者を求めなくなると考えられる。